

玉造厚生年金病院広報誌

夕映え

2006 冬号 vol.10

— 理念 —

1. 私たちは、医療人としての責任を自覚し、研修をおこたらず安全で水準の高い医療の提供に努めます。
2. 私たちは、患者さまが自立した生活を送れるよう身体機能の回復、維持、日常生活動作の改善を支援します。
3. 私たちは、「いつも笑顔で真心こめて」をモットーに、患者様の立場に立った心温まる医療を行います。
4. 私たちは、地域の人々のために、保健・福祉活動の充実に努めます。



脊椎外科センターを開設して

脊椎外科センター長 千束 福司

当院の前進である玉造整形外科病院の時代より、この中国・四国地区で唯一の整形外科病院として数多くの脊椎手術を行ってきましたが、脊椎の分野のより一層の発展を期するために、2006年10月1日、脊椎外科センターを開設いたしました。

現在、当院では年間250から300例の脊椎手術を行っていますが、高齢人口の増加（平成17年島根県は26.5%で日本一）に伴い、加齢が原因の病気の手術が多くなっています。このセンターの目的は脊椎手術をより専門的な立場から継続して一貫した治療体制をとることにあります。すなわち手術が決まれば、外来の時点で術前の身体状態を評価し、合併症の対策を行い、入院後は手術、術後管理・リハビリテーションを実施、また退院後は術後経過の

診療と同一スタッフによる一貫した治療体制を取ることで、患者様に安心して治療に専念していただくことが目的です。

病院開設61年目をむかえ、当院では今までにも非常に多くの脊椎手術を行ってきました。正確な症例数については確定できませんが、昭和20年代（特に25年以後）は腰椎椎間板ヘルニアが最も多く239例、また現代では非常に少なくなった脊椎カリエスも64例行いました。昭和30年代には腰椎椎間板ヘルニア、腰椎分離・すべり症、変形性腰椎症などの疾患に対して868例の手術を行い、特に腰椎分離・すべり症に対して92例の後方固定術を行っています。昭和43年より54年までは腰椎の各種疾患に対して固定術（後側方固定術）を併用すること



センター外来



センター病棟



カンファレンスの様子

が多く205例、昭和54年以後は（手術名簿が残存して）、正確な症例数を数えることが出来、昭和57年までは184例、58年以後症例数が徐々に増加して、昭和58年より平成18年9月までに5161例を行っています。

2006年10月28日には玉造脊椎外科センター開設記念講演会がくにびきメッセの国際会議場にて開催されました。講演は「腰痛の予防と治療」というテーマのもと、整形外科医長大西勉先生が「腰痛のメカニズム」について講演、腰痛の発生機序・様々な原因について解り易く説明しました。続いて理学療法士である来海悟先生が「腰痛の予防と再発防止体操」をビデオを駆使して説明、最後に私が「腰痛の最新治療」特に腰椎椎間板ヘルニア・腰部脊柱管狭窄症・脊椎骨粗鬆症（圧迫骨折）についてその治療方針・最新治療法について講演しました。

講演後には多くの質問が寄せられ、腰痛に対する市民の方の切実な悩みが伺えました。講演終了後に行った無料相談会においても多くの方の相談を受けました。講演会は約400人の多数の市民の方の来場を得まして、盛況のうちに終了致しました。この場をお借りして、関係各位にお礼申し上げます。

脊椎外科センター開設により、患者様により快適

な生活を過ごして頂きたいと思っています。そのため私共スタッフ一同は、より充実して、より最新の医療を、患者様に提供出来るように頑張る所存で御座居ます。皆様のご協力宜しくお願い申し上げます。



記念講演会にて

—脊椎外来診察表—

月曜日	午前	千束副院長
火曜日	午前	大西 医 長
水曜日	午前	池 田 部 長
金曜日	午前	石 部 医 長
	午後	千束副院長（第2週を除く）

職 員 紹 介



西脇 聖一
整形外科医員
平成18年7月1日採用

平成18年7月1日より当院にて整形外科医として勤務しています。大学時代より滋賀県で過ごし、当地にやって参りました。最初は環境に慣れず、人見知りする性格(?)というもあり、なかなか馴染めずにはいましたが、徐々に慣れてきています。医師としてまだまだ未熟な面も多く、ご迷惑をおかけすることも多いと思いますが、これからも自分を磨いていきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

医療の現場から ~治療トピックス~

胃がん検診と経鼻細径胃カメラ

消化器科部長 芦沢 信雄



現在胃がんによる死亡数は減少傾向にあり、増加傾向の肺がんによる死亡数に追い越されましたが、決して胃がんそのものは減少しているわけではありません。胃がんの場合には早期発見、早期治療により死亡率が低下してきており、胃がんが出来ても完全に治療する人の数がかかなり増加してきています。統計では死亡数しかわかりませんが、おそらく臓器別がん罹患数（がんになった人の数）ということになると、やはり胃がんが最も多いのではないのでしょうか。早期治療のためにはまず早期発見です。

胃がんの早期発見には、なんと言っても胃カメラ（口から内視鏡を挿入して食道・胃十二指腸を観察する検査）です。胃透視（バリウムを飲んで胃を撮影するレントゲン検査）と比較して胃カメラの方が早期胃がん発見率も高いことは明らかですが、苦痛のために胃カメラを敬遠している人も多いようです。当院ではこのような方のために鼻から挿入できる細径の胃カメラを導入して、食道・胃・十二指腸検査を行っています。太さは従来の胃カメラの約半分（直径5mm）であり（図1）、さらに図2のように鼻腔から入り舌の奥の方を刺激しないので、嘔吐反射が起こることがなく苦痛が非常に少なくなりました。今までに大変苦しい思いをしたために胃カメラ検査を敬遠していた方は、是非当院内科外来までご相談ください。ただし、この経鼻細径胃カメラ検査の対象となるのは今までの検査で苦痛がひどかった人です。やはり従来の胃カメラと比較すると画像がやや不鮮明となり。検査精度が少し低下しますので、今までの胃カメラ検査であまり苦痛のなかった方は従来の経口胃カメラでの検査をお勧めします。また、鼻血が出やすい人や鼻に病気のある人などは経鼻胃カメラ検査をしてはいけません。



図1 上 最新式胃カメラ
下 従来の胃カメラ

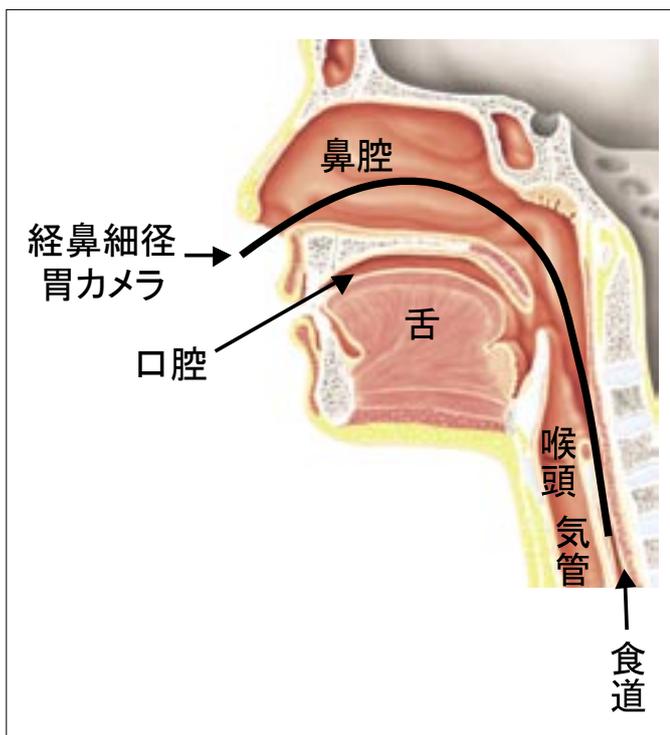


図2

ところで、大部分の早期胃がんは転移をするような進行した胃がんになるのに数年かかります。非常に進行の早い胃がんが稀にありますが、一般的にはみなさんが考えておられるよりも、胃がんは初期段階では非常にゆっくりと進行しているのです。したがって、少なくとも年に1回胃カメラ検査を受けていただければ、胃がんで死ぬことは稀なことになります。特に胃がんのために胃を部分切除した人や内視鏡治療を受けた人の場合、残った胃粘膜が何年経過してもがんの発生しやすい状態であることは明らかです。大腸がんの場合も同じです。このような方こそ毎年検査を受けることを忘れないでいただきたいと思います。いまだに胃がんで亡くなる人を度々見受けますが、今の時代に定期的な胃カメラ検査も受けずに胃がんで死んでしまうのは本当にもったいないことだと思います。これまた知らない、とても損な話です。

銭太鼓同好会

当院での銭太鼓の活動は、昭和57年に全国の年金病院7施設の看護師が集まって研究発表を行う「看護集団会」の懇親会でのアトラクション用に、看護師長さん達を中心となって急遽結成したのが最初です。

そして、平成17年11月19日に行われました「病院創立60周年記念パーティ」のアトラクションの席上で20数年ぶりに復活した銭太鼓。もちろん大盛況を博しました。その素晴らしい出来映えに、病院職員だけで楽しむのはもったいないと、さっそく院内の「クリスマスコンサート」にも出演依頼が決まりました。合奏や合唱が主体のコンサートに島根県の伝統的な民俗芸能「銭太鼓」が参加したことで、いつもと違った雰囲気のコングラチュレーションコンサートとなりました。銭太鼓のリズミカルな音と銭太鼓があちこちに転がる音など一糸乱れた演技に患者様も大喜び。コンサートは例年になく賑やかな催しとなり、たいへん盛り上がりしました。



そこで、年2回開催している院内コンサートで「フォレスト・アンサンブル」と「銭太鼓」のジョイントを毎回行い、入院患者の皆様方に更に喜んでいただくことと本格的な活動を創めることになり、今年の5月に「銭太鼓同好会」として新生しました。それまで看護師長ら女性陣が中心となって練習しておりました銭太鼓。同好会となってからは、男性も参加。そのせいか、女性達の練習にも一段と熱(?)が入るようになりました。今年の7月に行われた「七夕コンサート」では、念願の法被や、前掛け、袴など銭太鼓の衣装も揃いメンバーも上機嫌。

「七夕コンサート」に参加されなかった患者様のために、今年の冬の「クリスマスコンサート」では更に練習を重ね、熟年の熟練した技をお届けしたいと思っております。

そして、NHKのプロジェクトXで「島根の伝統芸能を守る職員達」というタイトルでTV放映されるまで、一生懸命に練習に励みたいと張り切っております。エッ「プロジェクトX」の番組は終わったの 残念!!

現在は、イベントの前に集中的に練習に励んでいますが、毎月1回定期的に集まって練習を行い、そして、職員だけではなく、銭太鼓に興味のある患者様方にも参加していただき、患者様と触れ合えるサークルとして活動できればいいなとも思っております。

銭太鼓同好会 メンバー 寒竹 誠治





放射線室スタッフ

1. 放射線室って、どんなところ？

一般的に放射線室はX線写真（俗にレントゲン写真といわれるものです）を撮影するところです。骨・関節や、肺・その他の部位の診断（画像診断といいます）を行うために必要なX線写真を撮影します。実際にはX線撮影のみならず、他にも多様な装置、たとえばCT装置やX線TVなどを使って画像診断のための情報の収集、提供を行っています。

2. 放射線室にはどんな装置があるの？

当院には先に述べたようなX線撮影をするための一般撮影装置を始め、透視検査などに使われるX線TV装置、歯科で主に使用するパノラマ撮影装置、骨粗鬆症の診断のための骨密度測定装置などがあります。

また、体の中を観察する断層装置として、X線を使用するCT（コンピューター断層撮影）や強力な磁石と微弱な電波により撮影を行うMRI（磁気共鳴断層撮影）があります。

特殊なものとして、病室や手術室で撮影や透視を行うポータブル装置や移動式X線TV装置があります。

（閑話休題：ところで当院の放射線室には、ほとんどの職員も知らない秘密の階段があります。放射線室の中ほどにあり、ベテランの職員でもどこにつながっているのか知らない人が多い階段なのですが、さて、どこにつながっているのでしょうか？ 答えは後ほど…）

3. どんな人が仕事をしているの？

放射線室で撮影を行っているのは、専門の学校を卒業し、きびしい国家試験に合格した「診療放射線

技師」です。日本の法律では人体に対し放射線の照射ができるのは「医師」、「歯科医師」、そして「診療放射線技師」だけです。当院には6名の技師がいますが、すべて専門知識の豊富な“プロの診療放射線技師”ばかりです。（ちなみに我々のことをレントゲン技師と呼ぶ人がいますが、これは全くの間違いです。医学用語にも、法律用語にも、どこにもレントゲン技師というものはありません。正しくは「診療放射線技師」です。厚生労働大臣より交付された免許にも「診療放射線技師」と記されています。）

4. 最後に

放射線というと大変危険なものと思われがちですが、決してそうではありません。確かに使い方を誤れば危険なものに違いありません。しかし、正しく使えば有益なものであり、現代の診療に不可欠なものです。我々6名の技師は患者様の安全の確保と医療の向上のため、日々努力と学習を積み重ねています。

ご不明な点などございましたら何なりと技師にお尋ね下さい。

（秘密の階段の行き先：階段を上っていくと2階の手術室になります。手術中の撮影の多い当院では撮影の便宜を考えて直通階段が設けてあります）

（文責 診療放射線技師 主任 永海 智之）

病診連携懇談・症例検討会議開催しました

当院では、昨年からの地域の開業医の先生方との連携を深めるために、松江地区、浜田地区で症例検討会を開催してきました。そして今回、初めてとなる出雲地区（会場：ウェルシティ島根）にて9月に開催をいたしました。

冒頭、当院の上尾院長より、「病診連携は相手の顔が見えることが大事だと考えています。このような機会を契機に、地域の先生方とお会いしてお互いを知ること、医師同士が信頼しあい治療を連携し継続できることが患者さまのための医療であると思います。」と挨拶を行い、引き続き下記の内容にて症例検討会ならびに意見交換会を行いました。

ご出席の先生方にはこの会の趣旨をご理解いただき、夕方までの診療後お疲れのところ多数のご参加をいただき、大変有意義な地域連携懇談・症例検討会となりました。

《症例検討》

- | | | |
|---------------------------|--------|-------|
| ① 日常診療で見落とされやすい整形外科疾患について | 整形外科部長 | 池田 登 |
| ② 重大な障害を残す頸椎疾患について | 副院長 | 千束 福司 |
| ③ 当院におけるNSAID潰瘍の推移 | 消化器科部長 | 芦沢 信雄 |
| ④ 玉造人工関節センターの現状 | センター長 | 小谷 博信 |

表紙の写真

9月29日に尾瀬で撮ったりんどうです。草紅葉がはじまった高原に楚々と咲いて秋を彩っていました。秋が深まってくるとれ花色が濃く冴えて美しく咲き、冷たさの増した風に揺られながらぽつん、ぽつんと人待ち顔にたたずんでいました。花屋のりんどうとは違って、花房が小さくそれが可愛くもあり、気高くもありました。会津地方では、「尾瀬りんどう」として栽培されているそうです。「尾瀬りんどう」は、自然に近い露地栽培で育つため、色鮮やかで花数も多く茎がしっかりとしています。りんどうの花言葉は「正義、的確、誠実」。花言葉まで凛としてますね。(F.S)

編集後記

この頃食欲がないと思ったら、秋が季節のバトンを手渡しする準備をもう始めていました。めっきり寒さが増してきて、我が家でもファンヒーターが家庭の中心に居座っています。本当の寒さはこれからなのに、先が思いやられるこの頃です。

辺りを見回すと紅葉の色づきも色あせてきて、まるで木々たちが苛立つかのように、落ち葉を見つめています。わたしたちも、何度も落ち葉を落としてはまた新たな芽吹きを迎えるこんな木々たちのように、たくましくそして柔軟さを持ち続けたいものですね。“人間は考える葦である”(K.H)

■ 編集・発行責任者 上尾 豊二
〒699-0293 島根県松江市玉湯町湯町1-2
TEL 0852 (62) 1560
<http://tamahosp.jp>

夕映えのバックナンバーはホームページでもご覧になれます。